

みこころを知る道

2008.11.18(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 8章12節から17節

ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。

26節から29節

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

ピリピ人への手紙 1章9節から11節

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。

コロサイ人への手紙 1章9章から12節

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈

り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。

エペソ人への手紙 3章16節から19節

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

最近ある未信者の方から要望があったのです。この集会の葬儀について、「もう少し少なくてもらいたい。本当は止めていただきたい」と、こんな要望がありました。未信者がそのような気持ちをもつことは分かります。しかし、人間が「死について考えたくない。いやだ」と思うことは、本当に愚かなことではないでしょうか。でも、いつかは死にます。それはいつになるか分かりませんが、本当のことなのでから。最期のことを考えなければなりませんね。人間にとって、「死」が終わりだったとしたら、大変です。最も恐ろしいことになります。なぜなら、人間は死んでから神の裁きを受けなければならないからです。

今一緒に歌った歌は、本当に良い歌です。心から歌ったかどうかは分かりませんが…。信じる者の中にも、自分の心に対し正直ではないにもかかわらず、歌いながら嘘をつく人がたくさんいます。今歌いましたように、「主よ、知らせたまえ。みことばを」と、本当にそのような気持ちがあれば、感謝です。

日曜日に御代田の集会である人の祈りを紹介しました。非常に素晴らしい祈りですから紹介します。それは、立派な数学者であるパスカルの祈りです。何度読んでも嬉しい気持ちになります。

「主よ。私は健康になりたい。或いは病気になりたい」と祈ろうと思いません。「健康になっても病気になっても、別にどうでも良いのです。生きていても死んでも、あなた様が栄光をお受けになりますように。私にとって何が良いことなのか、あなた様だけが知

っておられるのです。ですからあなたの望まれるままにしてください。(私たちもこのように言うことができれば大丈夫です。)

「あなたの望まれるままにしてください。与えられてもいいし、取られても結構です。そして主よ、ひとつのことだけを確信しています。あなた様に従うことが自分にとって最高であり、あなた様を悲しませることは自分にとって損になるのです。つまり、私にとって必要なことは、「健康」なのか「病気」なのか分かりません。また、「富」なのか、「貧しさ」なのかも分かりません。他のすべてのことについて考えても同じです。人間にとっても天の御使いたちにとっても、全く分からないのです。「私にとって何が良いか悪いが分かりません」。これは一つの奥義です。私はそれを知ろうとしません。私はただあなた様を崇拜したい気持ちでいっぱいです」

と。

このような心構えがあれば、不安から、心配から解放されます。なぜなら、完全な主は完全に導いてくださる、ということです。

人間にとって是非必要なことは、皆さんご存じの通り「イエス様を知ること」、「新しく生まれ変わること」です。ですから、イエス様はいつも強調してくださいました。「あなたがたに告げます。人は新しく生まれなければ神の国を見ることはできません」と。つまり、救われないと…。さらに「あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもにならない限り、決して天の御国には入れません」。即ち、正直に、素直にならなければ、救われません。いくら立派な生活を送ろうと思っても、聖書を勉強しても、金を出しても、それは全く無意味なことなのです。

まだ救われていない人々にとって、大切なのは「救われること」です。けれど救われてからも、それで「OK」なのではありません。今、兄弟の読まれた箇所を見ても分かるでしょう。あの箇所はすでに救いにあずかった人々のために書かれたものです。(新約聖書の手紙は、未信者のために書かれているわけではありません。)それは、未信者が読んでも全く意味のないことです。笑い話です。信じた者のために書かれているものです。

そして、信じた者にとって必要なのは、「聞く耳を持つ」ことです。「みこころを知る」ことです。それから、「主に従おう」と切に望むことです。自分の力ではできないのはもちろん決まっています。けれども、そのような心構えがあれば、主は働いていてくださるのです。最も大切なことは、「御霊の導き」を求めることです。A兄は質問したのです。今日のテーマは何でしょうか、と。『みこころを知る道』と言ったのです。「みこころを知る必要」でも良いけれど、「みこころを知る道」が良いだろうと賛成し合いました。

「みこころを知ること」こそ、考えられないほど大切なのではないのでしょうか。そうすると、どうしたら主のみこころを知ることができるのかという質問が出てきます。結論から

言いますと、主のみこころはただ「主の霊によってのみ」、「御霊の働きによってのみ」知ることができるのです。主のみこころを知ろうとする者は、「御霊に導かれる生活」をしていなければなりません。ですからその前に、どうしたら「御霊に導かれる生活」を送ることができるのかを知る必要があります。そのために必要なことは二つです。

一つは、みことばを聞く備えです。

二番目、みことばに従う備えです。

詩篇の作者である、みこころにかなったダビデは祈りました。詩篇 143 篇は、非常に素晴らしい祈りです。私たちも、毎日彼のように祈るべきではないかと思えます。

詩篇 143 篇 10 節

あなたのみこころを行なうことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。

ダビデは、「大丈夫。私は知っている」、そのような気持ちを持っていなかったのです。ですから、心から「教えて下さい。導いてください」と祈ったのです。

主のみこころにかなうダビデは、次のように御霊の導きを求めて祈っています。「あなたのいつくしみ深い霊が、御霊が、私を導いてくださるように」と。

このダビデの祈りは、私たちの祈りにもなっているのでしょうか。ダビデは主のみこころにかなった者だと聖書は語っています。私たちも主に喜ばれる者になりたいものです。しかし、主のみこころにかなう者となるには、どうしても「御霊に導かれる生活」に入らなければなりません。ですから私たちもダビデと同じように、「あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように」と、新たに心から、主の御前に祈りをささげたいものです。

この箇所を見るとダビデは、「あなたこそ私の神であられます」と言っていますが、御霊の尊い導きを受けるにはまず「新しく生まれ変わり」、イエス様のものとなり、御霊を内に宿している者でなければなりません。即ち、「あなたこそ私のものです。私の救いそのものです。私の神です」と言うことができなければ、最も大切なことに欠けているのではないでしょうか。ダビデの主に対する態度は、「主よ。教えてください」という態度でした。このように主の御前に教えを請うた人は、はかり知れない主の祝福にあずかります。生まれつき盲目であった男はイエス様の教えを請うたのです。彼は、「主よ。それはどなたですか。その方を信じたいのですが」と言ったとき、イエス様はご自分の御姿をその男に教えてくださいました。ヨハネ伝 9 章 37 節を見ると、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 9 章 37 節、38 節

イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。

彼は、礼拝した、崇拜したのです。「教えてください」。このような態度を取る人は祝福

されます。

使徒行伝 8 章は非常に素晴らしい箇所です。エチオピアの宦官も、ピリポという伝道者に教えを請うて、「誰かが手引きをしてくれなければどうして分かりますか」と救いを求めたとき、宦官は「救いにあずかる」ことができ、喜びながら旅を続けた、とあります。ちょっと読みましょう。2、3時間の内に、彼は悔い改めてイエス様を信じ、救われた証しとして洗礼を受けたのです。新幹線よりも速いですね。8章の26節から読みましょう。

使徒の働き 8章26節から28節

ところが、主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」(このガザは今、荒れ果てている。)そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

主の使いがピリポに向かって言ったとき、彼は「どうして、なぜ？」と聞こうとしなかったのです。

この箇所だけを見ても、宦官は財産家でした。欲しいもの全部を手に入れることができました。手に入らなかったものは、心の平安でした。変わらない喜びでした。エルサレムまで行けば生けるまことの神に出会えると思いついていたのですが、だめでした。彼は外国人だったので、宮に入る事が許されなかったのです。ですから外で、宮から出て来る人たちの顔を見てがっかりしたのではないかと思います。それはその人たちの中には喜びにあふれた人がいなかったからです。ですから、やはりエルサレムもだめだと思い、がっかりして帰ろうとしたのですが、彼は金持ちでしたから、旧約聖書の中のイザヤ書を買うことができました。当時イザヤ書を持っていた人はあまりいなかったようです。印刷された本はもちろんなかったでしょう。(だいたい皮に書かれたものでしたので、高価でした。)けれど、彼はお土産としてそれを買っただけではなく、帰る途中で読んだのでした。

使徒の働き 8章28節後半から29節

彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。

「御霊は導くお方」です。イエス様は、「彼はわたしの栄光を現わす」と言われました。

30節から35節

そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので「あなたは読んでいることが、わかりますか。」と言った。すると、その人は、「導く人がなければ、どうして分かりますか。」と言った。そして、馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。彼は卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼

の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。

ピリポはきっと急に嬉しくなったのでしょう。彼は口を開き、そして、「この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた」と記されていますね。嬉しくて嬉しくて仕方なかったのでしょう。「イエス様を紹介することができた」と。

36節

道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水あります。わたしがバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」

今のいわゆるキリスト教会内だったらそのようなことはあり得ません。少なくとも半年間洗礼の準備会に出ないと...、いろいろなこと学ばないと...。つまり「分からないとだめ」なのだそうです。ピリポは、このような愚かな男ではなかったのです。彼は素晴らしい。どうしてでしょうか。聖書には記されてはいませんが、彼は「悔い改めた」からです。

この宣べ伝えられた「イエス・キリスト」こそが、「ユダヤ人のための救い主」であるだけでなく、すべての人々のために、罪滅ぼしのために死なれたお方であると...

38節から40節

そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。それからピリポはアソトに現われ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

かのエチオピア人は、みことばに対して「聞く耳」を持っていただけではなく、彼は「みことばを受け入れ」、「みことばに従った」のです。結果として、聖書には記されていないし、また歴史の本にもはっきり書き残されてはいませんが、その後、アフリカの至る所で人々は導かれ、多くの教会の誕生となったのです。なぜなら彼は、「黙る」ことができなかったからです。出発点は、「教えてください」という心からの願いでした。

使徒パウロが素晴らしい改心をしてから後、「主よ、私は何をしたら良いでしょうか」と主の御前にへりくだって尋ねた時、主はパウロに行くべき道をはっきりとお示しになりました。イエス様に出会う以前の彼は、自信に満ちていました。「私は分かる」、きちんと「聖書を何年間も研究した」と思ったのです。やがて、自分は聖書を知っていると思ったけれど、本当は聖書の内容が全く分かっていなかった。私は神に仕えていると思っていたけれど、本当は知らないうちに悪魔の道具にされていたのだ、と。それから完全に自信をなくしたパウロは、「主よ、教えてください。どうしたらいいか分かりません」と...

ある人が私の家に来て話した、(多くのことは余り話されませんでした)一つの言葉が忘れられません。その言葉を聞いたとき嬉しくなりました。「私はごみです。役に立たない、捨てられるべきものです」と。主はそのような人々を捜し求めておられます。「自分はできる」、「自分は知っている」と思えば、役に立たない器となります。主は知らん顔をなさいます。パウロは、いわゆる「自分自身」から解放されました。そしてそのときだけではなく、生きていた間ずっと毎日祈ったことでしょう。「主よ、どうしたら良いのですか。教えてください!」と。

一つの実例が使徒行伝 16 章 6 節を見ると、次のように書かれています。

使徒の働き 16 章 6 節

それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、ブルギヤ・ガラテヤの地方を通った。

御霊が禁じられたことに対して、「どうして、なぜ?」と聞こうとしなかったのです。パウロは、「御霊が導かれなければすべてはうまくいくはずがない。主は祝福することがおできにならない」と分かったのです。またこの使徒行伝 16 章の獄吏は、パウロとシラスに言ったのです。「先生がた。私は救われるために、何をすべきでしょうか」と、ふるえおのきながら教えを請うたとき、「イエス様を信じなさい。そうすれば、あなただけではなく、家族もみな救われ、幸せになります」と、驚くべき救いのみことばが与えられたのです。

今あげたこれらの人たちはみな、主のみこころを聞く備えができていました。また、主に従う備えもできていました。主に従いやすい柔らかい心を持っていたのです。御霊の導きは、聖書のはっきりとした約束です。イスラエルの民は、それを実際に経験しました。何十年間も。では出エジプト記 40 章を見てみましょう。

出エジプト記 40 章 34 節から 38 節

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は主の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

とあります。御霊の導きの約束はダビデにも与えられました。ダビデだけではなく、私たちにも与えられています。詩篇 32 篇 8 節。皆さんよく知っている、素晴らしい約束です。

詩篇 32 篇 8 節

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。

主は、教えたくて教えたくてしかたがないのです。これは主のお心そのものです。このことばはもちろん私たちにも与えられている素晴らしい約束です。イエス様も、御霊の導きについてははっきりと語っておられました。ヨハネ伝 16章13節を見ると、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 16章13節、14節

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

つまり、この方が「わたしの栄光を現わす」と。イスラエルの民が荒野を旅したとき、主なる神が「雲の柱」、「火の柱」をもって導いてくださったと同じように、すべての救われた兄弟姉妹は、御霊の導きを受ける「素晴らしい特権」を持っているのです。もし聞く耳があれば、また従う心構えがあれば...

パウロは、ローマにいる兄弟姉妹にも短い文章ですが次のように書いたのです。

ローマ人への手紙 8章14節

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。

御霊に導かれることこそ、最も大切です。御霊がイスラエルの民を導いていこうとなさった目的地は、実り多いカナンの地でした。御霊はいつも一つの目的をもって、そこへ私たちを導こうとなさいます。イスラエルの民の経験について、おもに詩篇の中にたくさん書いてあります。例えば、78篇の53節を見ると次のように書かれています。

詩篇 78篇53節前半

彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。

短くまとめられています。彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかったと。

詩篇 107篇7節

また彼らをまっすぐな道に導き、住むべき町へ行かせられた。

とあります。イスラエルの民が荒野をさまよったとき、いろいろなことが起こり、小さな一つ一つのことを取り出して考えますと、安らかに導かれたとは言えないかもしれませんが、しかし御霊は最後にカナンの地に導き入れてくださいました。それを考えると確かに、御霊はご自分の民を安らかに導かれたと心から言うことができるのです。

同じように、私たちも、御霊が私たちを導こうとなさっておられる目標をはっきりと見

つめて歩まなければならないと思います。恵み深い御霊は、私たちをイエス様と同じ姿に変え、天的な完全さと、また霊の満たしへと導いておられるのです。私たちもイスラエルの民の場合と同じように、周りに起こる一つ一つの問題や苦しみや悩みを見るとき、主は自分を捨てられたのではないかと疑います。けれど、導かれてから後ろを振り返って見ると、過去に起きた病や悩み苦しみ、ありとあらゆる問題は、御霊の導きであったと認めざるを得ません。御霊が導こうとなさる目標に行き着くまでには、いろいろな問題が私たちの身に起こってくるでしょう。しかしその度に「主のみこころは何であるか」、教えていただかなければなりません。

問題が起こると私たちは祈ります。けれど、結果が現われない場合があります。祈り会においても同じです。聖書を開き、みことばを学んで祈ります。けれど、結果が現われません。いったいどうしてでしょうか。その理由は、これから祈ろうとすることは主のみこころであるということを確認していないからです。したがって祈りの中に、「みこころならば、このようにしてください」、「みこころならば、あのようしてください」という言葉がたくさん出てきます。このような状態ですと、祈った後にも確信がわいてきません。誰かが、祈りは聞き届けられたのかと尋ねますと、それを願っているとしたか答えられないのではないのでしょうか。けれどこのような祈りの態度は、聖書に記されていません。また、主もこのような態度を求めておられないでしょう。まず「主のみこころが何であるか」を教えていただき、それを確信し、信仰による祈りをささげなさい、と聖書は私たちに教えています。

エリヤは主のみこころを確認して立ち、権威を持って次のように言いました。列王記上の17章です。素晴らしい証しです。私たちの雑誌の題名も出てきます。「主は生きておられる」と。

列王記・第一 17章1節後半

「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」

彼は、誇りを持って、喜びと確信を持って言うことができたのです。「主は生きておられます」。彼は自分自身のために生きようとしなかったのです。「私は主に仕えている者です」。

17章1節後半

「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。」

そうなれば大飢饉になります。悩む人々は大勢になります。もちろん、そのようになりました。けれどこのエリヤは、特別な人ではなかったようです。ヤコブ書を見ると、次のように書かれています。

ヤコブへの手紙 5章17節、18節

エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないようにと祈ると、三年六カ月の間、地に雨が降りませんでした。そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。

エリヤは特別な人間ではなかったとあります。この箇所を見ると分かります。即ちエリヤの祈りは聖霊に導かれた祈りだったからです。ですから聞き届けられたのだ、ということが分かります。

私たちももし御座にまで届く祈りをしたいなら、御霊に導かれる祈りをささげなければいけません。大切なのは祈りではなく、祈りの前に主のみこころを確信して立つことです。この確信を私たちに与えてくださるために、御霊がおいでになりました。

パウロは、この御霊の働きの大切さについて次のように書いたのです。ローマ書 8 章。よく引用される大切な箇所です。

ローマ人への手紙 8 章 2 6 節前半

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。

即ち、私たちは強い、私たちは知っている。そのような気持ちは全くなかったのです。ですから、初代教会は考えられないほど成長をしたのです。私たちは大したものではありません。けれど大切なのは、私たちではなくて、御霊が働くことができるか、できないかということです。

ローマ人への手紙 8 章 2 6 節、2 7 節

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

御霊は、私たちの祈りを導くためにおられます。そしてまことの祈りは、私たちを通して祈られる、御霊の祈りです。御霊はまず、私たちに主のみこころを教えてください。そのとき私たちは、イエス様にある信仰を持って祈ることができ、祈りが必ず聞き届けられるという確信を持つことができます。信仰と確信の欠乏は、主のみこころを知らないところから来ています。ですから多くの祈りが聞き届けられないのです。私たちは主のみこころをはっきり知るまで待ち望み、みこころを知ったのち初めて行動すべきなのではないでしょうか。

モーセの場合がそうでした。まず主が語られ、次にモーセは主の言われたとおりに行動しました。パウロもまず、主の御声を聞き、次にその御声に聞き従いました。イエス様は、ヨハネ伝 1 4 章 1 0 節で次のように言われました。

ヨハネの福音書 1 4 章 1 0 節後半

「わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」

ここで分かることは、イエス様は心の内にささやかれる父の御声に従っておられた、ということです。イエス様は実際に耳に聞こえる声、また周りに起こることどもによって導かれていたのではありませんでした。大切なのは、御霊が私たちの霊にお語りになり、私たちが主のみこころを知って、それを確信して立つことです。私たちを導くことのできるお方は聖霊だけであり、また、御霊と聖書のみことばは常に矛盾することなく、その間に一致があります。

御霊は、私たちのためにみことばを用いて語りかけてくださいます。私たちは何か問題にぶつかっているとき、御霊は聖書のみことばを取り上げて、それを生かし、私たちの心に投げ込んでくださいます。内住の御霊が、聖書のみことばを生かして語りかけてくださいます。私たちを導き得るのは御霊だけです。ですからパウロは、ローマ書 8 章 16 節に書いたのです。

ローマ人への手紙 8 章 16 節

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

と。

このみことばは、信仰生活の初めに当てはまるみことばであるばかりでなく、信仰生活を送っていく間にも当てはまることばです。初めに神の子であることを証ししておられた御霊は、私たちの内に語りかけながら私たちを導いてくださいます。

導きは内に住みたもう御霊によってだけなされるのです。そしてこの内住の主の導きは、特定のキリスト者だけでなく、すべての主に救われた兄弟姉妹に与えられている特権です。実際に何かの問題にぶつかった場合、どのように御霊の導きを知っていくか、という点について、次回も続けたいと思います。

了